

されたらばどうしやう、

私は今外にそぼ降る秋雨の音をききながら、御悼の文の筆をさし置いて灯をかかげて榛名湖の畫を凝視した、

銅版の忘られない印象

南 薫 造

昨年の秋、上野公園内精養軒に於て、黒田清輝氏の祝賀會が催された時、自分は初めて大下藤次郎氏に會つた、親しく話をした。不幸にして之れが前後、只一度の會合であつた。

個人的の交りは、斯くの如くであつたけれども、然し乍ら、氏の名を知り氏の作品を見て居るのは、既に十年にも及ぶ、畫家としての交りは、其の個人的の交際よりも、其の作品に於てする方が、遙に意味が深かい、其れで氏の名を聞く時には、自分がまだ、氏に遇はなかつた以前に於ても、既によく知つて居る人の名の如く考へられて居た。

自分が初めて氏の名を知つたのは、十數年前、まだ田舎の中學校に、生徒であつた時に『水彩畫の葉』の發刊せられた時であつた。書物の挿繪や、印刷物の他に洋畫と云ふものゝ智識を、少しも持たなかつた當時の自分には、此の書物は、よき賜物で、多くの技法を教へられた、中に挟まれた銅版の『早稻田の秋』と覺えて居るは何時迄も忘れられない印象を、幼なかつた自分の頭に與へた。

勤勉なる氏の作に就いて此所に管々しく、稱讚の詞を述べなくても、世の既に熟知して居る處である。

氏の晩年數年間の製作は、自分が外國に居た爲めに、見る事が出来なかつたが、今年久振りにて、公設展覽會に於て見て感が深かつた。

十數年前初めて「水彩畫の葉」に依りて景色を見る爲めに、黒枠を造る事を教えられた自分は、今日氏の令息から、黒枠の附せられた書を送られて、誠に悲しみに堪えぬ。

終りにのぞんで、此の「みづゑ」が、氏の逝去と共に、廢刊になる事を誠に遺憾に思ふ、折角これ迄續けられた此の雜誌は、誰かによつて、後を嗣がれん事を、切望して止まない。(十六日、雨のしとくと降る日。千駄ヶ谷の寓居にて)

素人の偽らざる書評

山 崎 紫 紅

大下君にお目に掛かつた最後の日は、文藝協會私演の初日でありました、奥さんと御一緒に、見物されてゐた、私も幸ひ連れもなし、その席に割り込んで、「人形の家」から舞、踊劇の一二と見て三の「鉢かづき」を残して歸りました。すると翌日畫ハガキを頂戴した。

「切の鉢かづきは、中々實があつて、面白く見ました、とに角配合もよく、近頃のない愉快を覺えました」とある。十月、私は旅をしました。臺灣へ行つて、臺南、臺中を見物して再び臺北に出た日に、其地の臺灣日々新聞を見て、始めて大下君の計を知つたのです。しかし私は眞實だと思ひません、平素からあまり丈夫な方ではないが、十日や十五日の間に人間の死、永遠の別れ、そんな事があるなんぞと、どうして思へるものですか、その時私は迷つたのでした、だが新聞の記事は偽りではないやうです。よしあまりに輕率だと笑はれても、とに角御挨拶だけは致して置いた方が禮を失はない譯になるのであらう、そこで奥さんに宛て、悔み狀を出したのでした。

十五日の笠戸丸で私は内地に歸りました、そして種々の新紙を見ました、而して南清の事件よりも、私に直